

佐野 藤三郎さんの ことば

1 石碑

佐野さんの出身地、東区木戸にあるすわ神社のけいだいに、佐野さんの亀田郷への思いをしるした石ひがあります。(昭和46年に作られた石ひです。)

※ 意味をかえず、わかりやすく書き直したものです。

亀田郷はまわりを水にかこまれ、おいしげるあしと水鳥の鳴く 低地^{ていち}で低地であった。人々は水をふせぐ方法もなく、どろ沼のような深い田にこしまでつかって、「これもしかたないか…」と思いながら米作りをしていた。こう水の時のひがいはすさまじく、たてようもない。

しかし水とのたたかいは、ふるさとを愛する心と人々の結びつきを強めた。排水機場を作る時は、材料が足りない、土がゆるいなど 苦勞^{くろう}は多かったが、寒さにふるえながらくわやすきをもって米作りをする人々の姿を思い出してがんばった。新潟地しんの時は、地面がわれ、田んぼが波うち、排水機場もこわれ、悪いゆめのようであった。われをわすれてあせを流してがんばった。

今、古くてなつかしいものが次々と姿を消そうとしているが、人々がふるさとを愛した「けっしょう」(今の亀田郷のゆたかなすがた)は、永遠になくなることはない。

昭和46年11月3日

亀田郷土地改良区理事長

佐野 藤三郎

2 『佐野藤三郎さんをしのぶ』(H8佐野藤三郎記念誌編纂委員会)

①P45～

朝から晩まで親は働いておって、「百姓っていうのは太陽が出てから家を出るようでは駄目だ。日の出っていうのは野良に出て拌むものなんだ」と、教えられてきたもんですよ。

私は七人兄弟の三番目ですが、物心ついたら上は誰もいない。いつどう死んでるのかも分からない。薬もない。頭のシラミを食べさせたら病気が治る、といわれた時代です。

食べるものという、大根飯、かて飯。母親の苦しみを小さいときから見てきているものだから、母親を助けたいと思って、もう学校から帰ってくると子守をやる。子供を負ぶって村の暴れん坊に引っ張り回されていました。

ですから、母親が具合悪くて起きられないとき、私にこっそりと「ご飯炊いてくれないか」と頼む。おれ、小学校三年生からご飯を炊いたからね。

子供のころは病気もし、体も弱い方でしたが、小学校からこやしおけ担いで野良作業の手伝いもしました。これが後々きつい労働にも耐えられるようになりました。いまでは、考えられない時代でしたね。

②P48

稲刈りのときなどは朝くらいうちに起きてかまを研いでうすうす明るくなるのを待っている。霜の降りている田んぼに入ると足が切れるほど冷たい。

③P59～

亀田郷は、信濃川と阿賀野川に挟まれた地域です。二つの川が上流から運んできた土砂が堆積してできた所で、大きな沼地のようなものでした。

汽車で亀田郷を通りかかった人が「こんな所に湖があったかな」と首をかしげた話があります。地図を広げてもないわけですよ。アシの生えた沼地だからね。だから地図にない湖といわれました。今じゃ、想像もできませんがね。

ここで胸まで泥水につかって米を作ってきました。水と土とのどろまみれの闘いです。いくら話しても分からないと思いますよ。泥沼の中に入ってみないかね。

農作業は雪解けを待って、早いと二月末頃の田打ちから始まる。足が冷たくてね。氷の張った所をやったこともあります。

田植えは水につかりながら、秋も水の中での収穫。一日中つかっているんで、感覚がなくなって。みぞれの降るころは身を切られるほど冷たくて腰までつかっていられないので舟を使います。そうやって生きる以外になかったですよ。人に負けるのが嫌で、私は一番能率を上げた方でしょう。

そんな苦労しても水害に遭って、米はほとんど取れない。ゼロメートル地帯で、水が出なくても水浸しになる所ですよ。「今年は水害もなく豊年満作だよ」というときに、一反（十アール）当たり俵五つ（三百キロ）取れば豊作でしたよ。

五俵取れたうち地主の蔵に入るのが三俵。そこから小作米を出したんですよ。小作農の苦しみはひどかったですよ。大きな社会矛盾から解放させなくちゃ、と思いましたよ。自分の食いぶちもでない。収穫のないときは、タニシも命の綱でした。こんなばからしいことがあっていいのかとね。

そんな中から農機具や肥料を買わなきゃならんということで、青田売りといって、秋の米を担保にして肥料などを買ったものです。

「雪が解ける前に農家の財布は空になるんだ」といわれたもんですよ。だからまともな米は食べられなかった。細米に大根菜を細かく刻んだものをたきこみかて飯とたくわんにみ汁これだけでしたわ。

豊作で喜んだときのことを覚えています。正月は部屋の中に俵を積んで年を取り、夏ぶきといって、もみのままで納屋のはりの上にむしろだてして貯蔵した。水害による不作などに備えたわけです。

④P62～

三百年間も水に苦しめられてきた亀田郷ですが、この泥田を乾田に変えようと農民は決意します。昭和十六年、食糧増産の国策により、栗ノ木排水機の工事が始まりました。二十三年に運転開始となり、胸まであった水が引いていったんですよ。

土が見えてそこに太陽が当たる。夢にまで見た乾田化が成功するのはずっと後の三十二年になってからですが、土が顔を出したときは皆踊り狂って、欣喜雀躍（きんきじゃくやく）、手の舞い足の踏む所なし、そんな喜びだったですよ。

排水機が完成しても、水路もなく大雨が降ればまだ水が出るし、通年運転できない状態でした。大蔵、農林省など国に何度も足を運び、二十三年から水路や道路を造るなどして耕地整理を始めました。

ところがですね、耕地整理は進み泥田からは解放されていきましたが、亀田郷土地改良区は二十四億円の借金で首が回らなくなってね。工事費の支払いや、借入金の返済などがたまった

んですよ。

3 映像「佐野藤三郎インタビュー集」

栗ノ木排水機場は、あの頃東洋一と言われ、23年に動き出した。初めて亀田郷の田んぼが太陽のもとに顔を出した。

それは、亀田郷の農民が飛び上がって喜んだ。栗ノ木のポンプが動き出す。田んぼが顔を出す。それから耕地整理が始まった。

だから昭和30年に終わったんだけど、8年間で田畑9千ヘクタールの工事をやったんだからね。

昭和30年にこの区画ができあがった。一つの区画が20アール、ですから今では田植えから収穫まで全部機械の一貫作業ができるようになってきた。

これは、我々の祖先が長い間夢を見てきた姿と言えると思います。

こうした状態をつくり出したのは、やはり、亀田郷の農民が血と汗と涙でもってこの土地をつくり上げた成果でしょうね。